一茶入を棚にかざる事もあり、ちとかべの方へよせて、棚の時は羽ばうき置そゆるなり、

〔喫茶雜話〕臺子の事

一四つかざりといへるは、下の棚に釜、水指、ひしやく立、水こぼし也、但事により蓋をきをふろの左に置事も有、是は四の外也、有てなきものなり、口傳、

一七つかざりといへるは、此上のたなに、臺天目盆に茶入あり、是もふろの脇に蓋置あり、但事によるも也、多分は置なり、蓋置ともに七具なり、

〔茶道織有傳上〕眞の臺子の事附り風爐

それ眞の臺子の七ッ餝二ッ組といふは、此圖略○圖のとをり也、皆唐かねの道具を用べし、炭とりはさいろうにても、ふくべにてもくるしからず、これを略して六ッ餝三組、五ッ餝四ッ組、四ッ餝三ッ組、三ッ餝二ッ組、二ッ餝一ッ置、添置とも添組ともいふ也、天井の上に或は茶入と臺天目を置を二ッ組といひ、下に釜、水指、柄杓たて、ふたおき、火箸、水こぼし、柄杓ともに七ッ、これを七ッ餝といふ、上を組又置と云、下を餝と云也、眞の七ッ餝二ッ組を略して、作意にて色々に餝なり、扨座敷のつきに、右あがり左あがりといふあり、右の方客座なれば右あがりと云、左の方客座なれば左あがりと云、道具の組合手前もちがひしやうにいへども、あへてかはる事なし、上の組合の茶入を客の方に置、臺天目を勝手の方に置、下へおろしてもをなじ心也、扨手前は客座左の方ならば、身を左へひねり、水こぼしを右の脇へおろし、ふたおきを水こぼしの跡へなをすのみ也、又茶入をぼんともにおろし、臺天目も臺ともにおろすなり、手前の順々つねのとをりかわる事なし、又客入て、道具もち出、かざるといふ事惡き傳なり、眞のかざりを本として、略の時もありやうに客まへかたにかざり置、亭主は手ぶりにて出、茶たてたるがよし、略の作意の傳用にたらず、口傳臺子の寸法は眞の風爐釜より出る也、天井ひくければ火氣湯氣にて板ひぞり、又柄杓のさしと